HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ソクラテスの知恵とソフィストの知恵 : 『プロタゴラス』篇におけるシモニデスの詩を巡る議論
Author(s)	田中, 伸司
Citation	北海道大學文學部紀要, 37(1), 89-111
Issue Date	1988-11-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33533
Type	bulletin (article)
File Information	37(1)_PR89-111.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ソクラテスの知恵とソフィストの知恵

――『プロタゴラス』篇におけるシモニデスの詩をめぐる議論――

田中伸司

プラトンの『プロタゴラス』篇はローマ時代の編集者トラシュロス以来、「ソフィスト達」という副題が付けられている。この様な副題が付いていることは理由のあることである。即ち、「ソフィストとは、その名が示す様に、賢い事柄（τῶν σοφῶν）を知っている人である」（312c5-6. 藤沢令夫訳参照、以下同）とは対話篇の序幕にある言葉であるが、この対話篇にはその様なソフィスト達が描かれているが、中でも「当代随一の知者」（309d1）と呼ばれていたソフィスト・プロタゴラスとソクラテスとの対話が描かれているからである。しかし、それは単なるソフィストとソクラテスとの間の知恵比べではなく、ソフィストの知恵とは何であるかを問い、自らを知恵あるものと称するソフィストとの対話を通じて、そもそも知恵とは一体何であるのかを問うているのである。

ソクラテスとプロタゴラスの対話は「ソフィストとは何者であり」（312c4-5）、ソフィストの知恵とは何であるのかと尋ねるところから始まる。プロタゴラスは徳の教師であると宣言し、長い演説によって自らの立場を正当化する。ところが、ソクラテスに対話を仕掛けられ、しどろもどろとなり、自らの立場を建て直そうと詩を話題として導

入することになる。そこに展開されるのが、本稿で扱う「シモニデスの詩をめぐる議論」(338e6-348a9)である。

この「シモニデスの詩をめぐる議論」は、従来、ほぼ全ての学者が一致して、ユーモラスな息抜きとして、哲学的には何らの価値もないものと見なしてきたものである。[1] 本稿の目的は、この「シモニデスの詩をめぐる議論」が『プロタゴラス』篇の本筋からの脱線でもなければ、単なる知的遊戯や滑稽な気晴らしでもなく、むしろ、『プロタゴラス』篇の主題に、ある際立った仕方で光を当てている部分であることを示すことにある。即ち、『プロタゴラス』篇の主題は知恵であると考えられるが、ソフィストの言う知恵なるものの正体を暴露し、否定し去る、そういう形で知恵とは何か、それを浮き彫りにしようとしている部分であることを示すことにある。

「シモニデスの詩をめぐる議論」の構成は、序、第一部、第二部、第三部、結末という五つの部分から成っている。以上の構成に従い、ソクラテスが各部分の議論によってどの様な事柄に光を当てているのかを明らかにしたい。

序　プロタゴラスは詩の領域へと徳に関しての議論を移行させる(338e6-339a6)

プロタゴラスが詩を話題として導入し、「シモニデスの詩をめぐる議論」が始まる。ここでのプロタゴラスの狙いは、ソクラテスが彼に仕掛けてきた一問一答方式による対話を打ち切って、徳に関しての議論を自らの土俵で行うことにある。しかも、プロタゴス自身は、それによって、徳に関する対話をその最も相応しい領域で行うことになると考えている。プロタゴラスは次の様に述べて、詩の領域への移行を宣言している。「人間にとって教育の非常に重要な部分を成すのは、詩の言葉について有能であるということである。即ち、詩人たちの語ることについて、正しく詩作されているものとそうでないものとを把握し、それらを区別して、質問された場合に説明する能力があるというこ

とである」(338e7-339a3) と。これらの言葉は単に詩を話題として導入するために述べられたのではない。[2] プロタゴラスにとって詩は単なる話柄ではなく、徳について語る際の、殊に教育に目を向けた場合、その最も相応しい領域であり、欠くべからざる土俵なのである。プロタゴラスは既に彼の大演説の中で、徳の教育方法について「子供達に、数多くの訓戒を含み、昔の立派な人物たちを描写し称賛し讃美した言葉を数多く含む優れた詩人たちの作品をあてがって読ませ、暗記させる。こうして、子供達がそれを讃嘆しながら見習い、そのような人物になろうと憧れるようにしむける」(324e4-326a4) べきであると述べている。詩の言葉に注目し、その字義を把握できるようにさせるということ、つまり、詩の解釈の能力を身に付けさせるということこそが、ソフィスト・プロタゴラスにとっての徳の教育であり、徳の教師たるソフィストの知恵なのである。[3] では、具体的にはソフィストの知恵とは一体どういうものなのか。そのことが露になるのが「第一部　プロタゴラスによるシモニデス批判」においてである。

第一部　プロタゴラスはシモニデスの詩を批判する (339a6-e3)

プロタゴラスはシモニデスの詩を取り上げ、[4] その詩が正しく立派に作られているかと問う。ソクラテスは肯定する。すると、プロタゴラスはそのシモニデスの詩の中に矛盾があることを示し、ソクラテスをやり込めようとする。プロタゴラスが見出した矛盾とは、一方でシモニデス自身が「真にすぐれた人になることこそは困難である」と詠いながら、その直ぐ後で自分と同じ様に「すぐれた人であることは困難である」と言っているピッタコスを非難しているということである。プロタゴラスによるこの批判はソクラテスに対する論駁になっているが、ソフィストの知恵が言わば「論争のための知恵」であることも明らかにしている。プロタゴラスの知恵が論争のための、名声を得るための知

恵であることを、プラトンはこの対話篇の至る所で示唆しているが、[5] ここではソクラテスに言わせている次の様な傍白によって示している。「まるで挙闘の名人に一撃食らったかのような気がした。プロタゴラスがこういうことを語り終えて、他の者達がそれにやんやと歓声を上げた時、くらくらと目が眩み、眩暈を感じた」(339e1-3) というソクラテスの告白によって。

ところで、この時のソクラテスの傍白によって、プラトンは詩というソフィストの土俵におかれたソクラテスのある興味深い反応を描いてくれている。即ち、ソクラテスはプロタゴラスに対しては「その詩はよく研究したことがあります」(339b5-6)、「もう充分に考察済みなのです」(339c1) と答えていながら、プロタゴラスのシモニデス批判を聞くや、その傍白において「本当のことを白状するが、私は詩人の意味するところを考えてみるのに時間を稼ぐ」(339e3-5) 必要があったのだと述べていることである。プロタゴラスに対するソクラテスのこの応答は、勿論ソクラテスがプロタゴラスを向こうにまわして自らの慌てぶりを告白しているといった楽屋話し等ではない。ソクラテスにとって詩を研究することは詩の作られ方、詩の言葉を研究することではなく、それとは別のところにある。それ故にこそ、先程プロタゴラスによる論駁を聞いた時に、ソクラテスはその異質さに触れ「くらくらと目が眩み、眩暈を感じた」のである。第三部で明らかになるように、ソクラテスにとって徳の問題に関して詩を扱うのは詩を解釈することでも、詩の言葉の字義を穿鑿することでもなく、詩に詠われている事柄そのものを考え研究することなのである。

第二部　ソクラテスはプロディコスを証人に立ててシモニデスを弁護する (339e3-342a5)

ソクラテスはプロタゴラスのシモニデス批判に対して反論を試みる。ソクラテスはソフィスト・プロディコスを味

方に引き入れて、「なる」と「ある」の区別に基づく詩の解釈を提出し、更に、「困難」という言葉を捩じ曲げて解釈しようとする。これらの反論には二つの性格が認められる。その一つはプロディコス等、対話者以外の権威を持ち出し、これに頼って論正しようとしている点、第二はこれらの反論がプロタゴスが主張した「詩の言葉に有能である」ことによって為されている点である。第二部でのソクラテスによる反論は、それ故、一見、ソフィスティケーの単純なパロディであるように見える。しかし、この反論は単にソフィストの知恵を戯画化しているだけではなく、その戯画化のうちでソフィストの言う徳の教育、更には彼等の持っている知恵の奇妙さを浮かび上がらせている。即ち、この反論は徳の教師としてのソフィストに対する巧妙な argumentum ad absurdum となっているのである。

(1)「なる」と「ある」の区別による反論(339e3–340e7)

プロタゴラスはシモニデスが一方では「真にすぐれた人になることこそは困難である」と自分で言いながら、他方ではピッタコスの「すぐれた人であることは困難である」という言葉を「正しいとは思えない」(339c3)と言っている点を突いて非難した。これに対し、ソクラテスは「すぐれた人であること」と「すぐれた人になること」とは違うのではないかとプロディコスに尋ね、「このプロディコスにしても、他の多くの人々にしても、〈シオドスと共に、すぐれた人になることは困難であるけれども、しかし〈一度徳の頂きに辿り着くときは、先には困難であったこの徳も、それから後はこれを所有するのは容易であろう〉と主張することでしょう」(340c8–d5)と述べる。この反論がソクラテスの知恵にではなく、ソフィストの知恵に基づいていること、即ち、ソフィステケーによるものであることは、ソクラテスの言葉からも明らかである。というのは、ソクラテスは「なるとある」(304b5)の区別を導く際、「あなた

（プロディコス）の助けを呼びましょう。……シモニデスのために修正を行うにはあなたの持っている学識が必要なのです」（340a6-8）と述べているからである。[6] 事実、この「なる」と「ある」の区別による反論において行われていることは、「詩の言葉に注目し、その字義を把握」することによって、相手を打ち負かそうとすること、つまり、前節で明らかにされたソフィストの知恵に他ならない。また、この反論がソフィスティケーに適っていることは、「プロディコスはこれを聞いて僕を褒めてくれた」（340d6）というソクラテスの傍白によっても知ることができる。

ソクラテスによるこの様な反論に対して、プロタゴラスは次の様に反論する。「この詩人の無知は甚だしいものであるだろう、もしこの詩人が徳を所有するということを何かその様にとるに足らぬことだと主張しているとしたら。そのことは全ての人がそう思っているように何よりも困難なことなのだ」（340e5-7）と。このプロタゴラスの反論は重大な問題を含んでいる。即ち、「詩の言葉」に立脚するのではなく、自分自身が徳をどう考えるかということ、徳そのものについての、言わば裸の話に移行している点である。

プロタゴラスは自ら詩という被膜を取り去り、剥き出しの徳に直面しているのである。[7] プロタゴラスが詩の領域から徳そのものの話に自分から移行することは、せっかく自らの得意の場へと議論を移したことを駄目にしている。プロタゴラスはそれまでシモニデスの方を向いて話をしていたのであるが、ここで、ソクラテスの方に向き直ってじかに話さなければならなくなっているのである。即ち、詩を話題として導入することによって打ち切った筈の、ソクラテスがプロタゴラスに仕掛けてきた一問一答方式による対話の地平に自分から戻ってきてしまっているのである。このことはプロタゴラスにとって致命的である。なぜなら、このことはプロタゴラスがソフィストとしての知恵によってソクラテスに対応できないことを意味しているからである。最早、プロタゴラスは「詩の領域」という自らの土俵

ではソクラテスに対する反論を用意できぬことを思わずさらけ出したことになるからである。更に、このプロタゴラスの反論の中で、プロタゴラスの学識の専門性もまた危機に瀕している。プロタゴラスは素人の思いなしとは区別される[8]専門的学識を人々に授けると言い、自らをその様な知恵の、そして徳の教師であると公称し、事実、その様な専門的学識を授けることによって生計を立て、名声を得てきた。しかし、「全ての人がそう思っているように」というプロタゴラスの言葉は、その様な学識の専門性を否定することになる。プロタゴラスは素人の思いなしを含めた「全ての人の思いなし」によって、プロディコス等の専門家[9]に反論しようとしているからである。プロタゴラスはソクラテスの提示したソフィストの持つ専門知識に対して、自らのソフィストとしての専門知識によって反論するのではなく、全ての人の思いなし、つまり、常識や通念によって反論せざるを得ぬことをさらけ出してしまっているのである。[10]

この様に、プロタゴラスが「詩の言葉」の話から、自分が徳をどう考えるかという、徳そのものについての、「裸の話」へと自ら移行したことは、プロタゴラスが自らの知恵の無力さを自ら認めることに繋がる。従って、この「なる」と「ある」の区別を用いたソクラテスの反論は単にシモニデスのための弁護というよりも、むしろ「詩の言葉について有能である」徳の教師としてのソフィストの知恵に対する論駁として機能していることになる。

(2)「困難」という言葉の意味をすり替えることによる反論(340e8-342a5)

この反論は第一の反論と比べてより一層鮮やかにソフィストの知恵を戯画化し、彼等の持っている知恵の奇妙さを浮かび上がらせている。ソクラテスは「このプロディコスの知恵なるものは何か神にも似た力を持つものらしいのである、……私はこのプロディコスの弟子になっているお陰でそれを齧っているのであるが」(340e9-341a4)と述べ、

この第二の反論に取り掛かる。この様に権威ある第三者の証言により対話者を論駁しようとするのはソフィストや弁論家の得意とするところである。[11] 更に、「シモニデスの言葉遣いのことなら、当然この人（プロディコス）に尋ねるべきでしょうから」（341b7-8）と述べて、そのプロディコスの持つ権威というものが、まさにプロタゴラスの主張する「詩の言葉について有能である」ということに合致することを示している。[12] さて、ソクラテスは、ピッタコスの「すぐれた人であることは困難である（χαλεπόν）（341c4）」という言葉の中の「困難」という語を取り上げ、それが「悪い（困ったこと）」（341c2）を意味する可能性を示唆する。もしそうだとすると、ピッタコスの「すぐれた人であることは困難である」という言葉は「すぐれた人であることは悪いことである」と同じ意味になり、それ故、「言葉を正しく使い分けることを知らなかったといって、ピッタコスを（シモニデスは）非難している」（341c7-8）のだといってソクラテスはプロタゴラスに反論する。ソクラテスはこれを全てプロディコスの証言によって行っている。

この第二の反論に対してプロタゴラスは大いに憤慨する。「そんなことがあってたまるか。……私はよく知っているが、シモニデスだってこの困難という言葉で、我々他の者とまったく同じ様に、悪いものではなく、凡そ容易でなもの、多くの労苦によって得られるものを意味していたのだ」（341d2-5）と。このプロタゴラスの言葉は彼自身にとって致命的である。なぜなら、「我々他の者とまったく同じ様に」と述べることは、先の反論で「全ての人がそういよう思っているように」と述べた場合と同様に、詩としての言葉遣いの特殊性を否定することになる。[13] 従ってまた、プロタゴラスが人に授けるという学識の専門性を放棄することを意味するからである。プロタゴラスは自らの議論を守るためには、まさに徳の教師ソフィストとしての立場を放棄しなければならなくなっているのである。しかも、なおソクラテスの追及の手は緩まぬ。プロタゴラスを追い詰めたこの解釈をもたらしたプロディコスの学識をも、結局

は「戯れ」(341d7) として片付けてしまうのである。ソフィストの知恵とは論争のための道具であり、論争のための道具である限り「戯れ」にすぎないのである。

一見、単純なソフィスティケーのパロディに見えるこの第二部も、その実、徳の教育とは詩の解釈であるというソフィストの知恵を、同じソフィストの知恵を以て、ソクラテスが論難する argumentum ad absurdum となっているのである。ソクラテスはソフィスト達の知恵を極限に押し進め、その行き着先を示し、そうして辿り着いたソフィストの知恵の持つ奇妙さによって、プロタゴラスをその得意の領域から、詩という被膜を取り去った剥き出しの徳の話へと追い立てているのである。[14]

第三部　ソクラテスはシモニデスの詩についての自らの考えを明らかにする (342a6–347a5)

その安全な領域から追い立てられたプロタゴラスを、更に、この第三部においてソクラテスは剥き出しの徳の話へと引き摺って行く。ソクラテスはシモニデスが批判したピッタコスの言葉の背景を述べることから始める。ソクラテスは知恵を愛し求める哲学の営みがスパルタ人の間で最も古くから、最も盛んに行われており、[15] その知恵は皆「汝自らを知れ」「分を越えるなかれ」等といった寸言の形に表されるものであり、シモニデスが批判するピッタコスの言葉もこの様な伝統の中で伝えられてきたものであると述べる。寸言、つまり短い話し方こそはソフィストや弁論家の長広舌とは異なる、ソクラテスがプロタゴラスに仕掛けたかの一問一答方式を支えているものである。[16] このソクラテスの対話論法は、後に述べる如く、擬似対話へと姿を変えて、この第三部全体をも貫いている。それ故にこそ、ソクラテスは先ず「寸言」ということから語り起こしたのである。

次に、ソクラテスは以下の様に述べ、シモニデスの詩作の意図を明らかにする。即ち、「シモニデスは知恵の上で名声を得ようと野望を抱いており、あたかも有名な闘技者を打倒するように、もしこのピッタコスの文句を打ち負かし凌駕したならば、自分が当時の人々の間で名声を得るに違いないと気付いたのです。そこでこのピッタコスの文句に狙いを定め、この目的のためにこの句にケチを付けようと策謀してこの詩全体を創作したのであると、私には思われるのです」(343b7-c5) と。この詩作の意図、その知恵の性質という点でソクラテスはシモニデスをソフィストと、具体的にはプロタゴスと同一視していることは明らかである。[17] ソクラテスはシモニデスがピッタコスを非難するという構図に、プロタゴラスがシモニデスを非難するという構図を重ね合わせているのである。第一部で明らかにした如く、ソフィストの知恵は論争のための、名声を得るための知恵なのであるから。[18]

シモニデスの詩作の意図をこの様なものとした上で、ソクラテスはシモニデスの詩全体を読み解こうとする。即ち、ソクラテスは「ピッタコスが〈すぐれた人であることは困難である〉と言ったのに対し、シモニデスが異議を唱え」(343d3-5)、「真にすぐれた人になることこそは困難である」と詠い、また、この詩のその他の言葉も全て「ピッタコスに向け」(345c4) ての「攻撃」(345d1) となっていると主張する。そう読み解くために、ソクラテスは、読解の過程で言葉の意味や修飾関係についてかなり強引な操作を行っている。それ故、その有様は、一見、第二部のソフィスティケーのパロディにも似ており、従来、この第三部はソフィスト達が行うのとまったく同じ様な牽強附会に溢れ、何らの真面目な哲学的思想も無いものだと言われて来たのである。牽強附会と言われているものは、主なもので六つほどある。

① 「こそは」の修飾関係の操作 (343c7-344a6)……詩の第一行での「こそは (μέν)」という語はそれに続く何かと

の対比を示すのに使われる。ソクラテスはそれが第二連のピッタコスの「すぐれた人であることは困難である」という言葉との対比を示していると主張する（この操作は次の②「真に」修飾関係の操作と複合して使用されている）。しかし、第二連との対比を考えるよりは、むしろ第一連内での、今は失われてしまっている行との対比のほうがよりありそうだと思われる。[19]

② 「真に」の修飾関係の操作（343d3–344a6）……ソクラテスは「真に（ἀληθέως）」を「すぐれた」から切り離して「困難である」に掛けようとする。しかし、次の行の内容と照し合わせれば、「真に」が「すぐれた」を修飾していることは明らかである。なぜなら次の行は「困難である」ということの内容ではなく、「すぐれた人」の意味を展開しているからである。[20]

③ 「防ぐ術なき災い」の意味の操作（344c6–e4）……「防ぐ術なき（ἀμήχανος）」は能動的意味と受動的意味がある。即ち、災いを被る者が「術を欠いている」という意味と、災いが「否応のない圧倒的なものである」という意味との。ここでは「災い」を形容しているので、当然「否応のない圧倒的なものである」という意味にならなければならない。しかし、ソクラテスはこの「防ぐ術なき」という語を、「災いに打ち倒される」人間と関係付けて「術を欠いている」という意味に歪めて使用している[21]（この操作は次の④「幸福」、「不幸のときは　悪しき人」の意味の操作と複合して使用されている）。

④ 「幸福」、「不幸のときは　悪しき人」の意味の操作（345a1–b8）……ソクラテスは「幸福（πράξας εὖ）」を「善き行為（ἀγαθῆ πράξις）」と言い換えることにより、「悪しき人（κακός）」の意味を倫理的に悪い人という意味に解している。しかし、ここでシモニデスが意味していたのはもっと普通の「貧困、飢え、虚弱等のために、例えば物乞いや盗

み等を行う人」のことを念頭に置いていた筈である。[22]

⑤「自ら進んで」の修飾関係の操作（345d6-347a3）……ソクラテスは「自ら進んで（ἑκών）」をこれにすぐ続く「醜い所行をしない者なら」という語句から切り離して、その前の行の「誰でも私はたたえ愛する」に掛けようとする。即ち、ソクラテスは「私はたたえ愛する、自ら進んでたたえ愛するのだ、醜い所行をしない者であるなら」と読もうとするのである（この操作は次の⑥「醜をまじえぬものはすべて美しい」の意味の操作と複合して使用されている）。ソクラテスは、更に、この「自ら進んで」という語をシモニデス自身の境遇と関連付けて解さねばならぬと主張する。しかし、「自ら進んで」は「醜い所行をしない者なら」を修飾していると考えるのが、常識的であると思われる。[23]

⑥「醜をまじえぬものはすべて美しい」の意味の操作（346d1-347a3）……ソクラテスは「中間的な性格のものでもこれを非難せず受入れる」という意味だと主張する。しかし、ソクラテスが否定した「言わば黒の混じらぬものは全て白い」という意味にとるほうが普通であろう。[24]

確かに、もしソクラテスのシモニデスの詩についての演説が飽くまでも単なる「詩の解釈」であるとするならば、以上の様なソクラテスの行った操作は単なるソフィスト流の強引なこじつけであることになる。つまり、この第三部がソフィスティケーのパロディ、或いは、読者のための余興だという評価は妥当であることになる。また、その際、もし強引であるが故にソフィスティケーであるというなら、解釈からその様な強引さを取り除きさえすれば、真面目な詩の解釈ということになろうが、この時、ソクラテスはソフィストの流儀を認めていることになる。つまり、ソクラテス自身が詩の解釈をすることが徳について考察することだと認めていることになるのである。しかも、ソクラテスは上で述べた様な、言葉の意味や修飾関係についての強引な操作を、ソフィスト顔負けの大演説の中で表明してい

る様に見える。即ち、ソクラテス自身が主張し、堅く守ってきたあの一問一答の対話論法を自ら破ってしまったかの如くに見える。

だが、第三部は第二部とは異なり、対話者以外の権威を持ち出すことによって論証されてもいないし、また、この様なこじつけはプロタゴラスが主張した「詩の言葉に有能である」ことによって為されているとも考えられない。この第三部でソクラテスが頼っているのは、「自ら進んで悪を為すものはいない」といったソクラテス自身の考えである。それに対して、第二部はもともとソフィストの知恵に基づいており、ソフィスティケーによるものであった。それ故、第三部をソフィスティケーのパロディーであると認めることは、第二部をソフィスティケーのパロディーであると言うのとはわけがちがう。第三部を「詩の解釈」、或いはソフィスティケーのパロディーであると認めることは、その第三部を支えているソクラテスをソフィストであると言うのと同じことになる。即ち、ソクラテスはこの対話篇の中で一時的にソクラテスでなくなることになってしまうのである。

しかし、ソクラテスが片時とはいえソクラテス以外の者になって良いのだろうか。ソクラテスは詩の解釈を行っているのではない。ソクラテスはプロタゴラスが指摘したシモニデスの詩の矛盾の問題を利用して、「詩の言葉」というベールに覆われた徳の話ではなく、じかに徳についての詩人の考えを問い、プロタゴラスの知恵を問うているのである。また、この第三部は、一見ソフィスト流の大演説と見えるが、その底流を成しているのは対話なのである。上で見た様な、言葉の意味や修飾関係についての強引な操作を支えているのが、ソクラテスの対話の存在なのである。その対話とは現実の対話ではなく、シモニデスとの擬似対話である。[26] 上に挙げた強引な操作のうちの一つ、「自ら進んで」の修飾関係についての操作を例に取って、対話が如何に存在しているのかを見てみよう。ソクラテスは「自ら進

んで」の修飾関係についての操作を次の様に行っている。「誰でも私は愛したたえる、自ら進んで。…ここの『自ら進んで』のところで詩句を切らなければなりません…醜い所行をしないものなら」(346e1-3)と。ソクラテスは「シモニデスが自ら進んで悪をなす者がいると考える筈がない」と考えて、この操作を行っている。つまり、対話の相手をソクラテスが自分自身で創作しているのである。それ故に、シモニデスとの対話は現実の対話ではなく、擬似対話であることになるのである。ソクラテスは言う、「というのは、シモニデスは、自ら進んで如何なる悪もなさないものをたたえる、というようなことを主張するほど、無教養な人間ではなかったからです。それではまるで、世には自ら進んで悪をなす人々がいるとでも、彼が考えているようです」(345d6-9)と。ここには、ソクラテスの「自ら進んで悪をなす者はいない」という確信が述べられている。この後、更に、このソクラテスの主張の理由が加わるわけであるが、この様に議論、主張の理由を述べるのも「対話」の特徴である。しかし、それは単に主張の理由を述べるためだけになされたのではない。ソクラテスがその主張の理由を述べるのは、ソクラテスがシモニデスを反駁せんとしていることを示しているのである。ソクラテスは自らの主張の理由を述べることによって、シモニデスがなぜソクラテスの意見に同意しなければならなくなるかを示しているのである。[26] この様なソクラテスの擬似対話の結果が牽強附会という印象を与えているものなのである。しかもまた、このシモニデスとの擬似対話の内に現れるソクラテスの主張は、プロタゴラスが述べてきた様々な意見に対する非難になっている。[27]

結末　ソクラテスはこのシモニデスの詩をめぐる議論全体について批評する(347a6-348a9)

さて、それでは対話はどこまで実現したのであろうか。しかし、対話は本当の意味では実現しなかったのである。

第三部において、ソクラテスは「詩の言葉」というベールに覆われた徳の話ではなく、じかに徳についての詩人の考えを問うている。プロタゴラスもまた、第二部の終わりで口にせざるを得なかった反論の内で、自分が徳をどう考えるかということ、事柄そのものについての、言わば、裸の話へと移行してしまっていた。即ち、ここで、最早、「シモニデスの詩をめぐる議論」は、詩の話ではなくなっているのである。しかし、第二部でのプロタゴラスとソクラテスの議論は、確かに事柄そのものについての裸の話へと行き着いたのではあるが、両者の間には依然としてシモニデスの言葉が挟まっており、「対話」では有り得ない。また、第三部のソクラテスとシモニデスとの対話も、詰るところソクラテスが独りで作り上げた擬似対話でしかない。ソクラテスとプロタゴラスは、各々「詩の言葉」という被膜を取り去って、裸の話の地平へと下り立っているのではあるが、互いに直接相手と触れ合う、面と向かっての話をしているわけではないのである。そこで、ソクラテスは自らも関わってきた「シモニデスの詩をめぐる議論」全体に批判を向けることになる。なぜなら、ソクラテスがシモニデスを教導することによって達成されたのは確固たる真理ではなく、ソクラテスの意見の単なる主張であるからである。また、同様に、このソクラテスの意見の主張と表裏一体の関係にある、プロタゴラスに対する反論が論駁とはなり得ず、単に非難にしか過ぎないものであるからである。どうして単なる意見の主張となるかと言えば、ソクラテスとシモニデスとの対話が十全な対話でない、つまり、飽くまで擬似的な対話に止まっているからである。というのは、「詩人の語ることについて質問することはできず」(347e3-4)「はっきりとは確証できない」(347e6-7)からである。また、プロタゴラスに対する反論が論駁とはなり得ず、単に非難にしか過ぎないのも、同じ理由による。というのは、真の対話は「自分達自身の言葉の中で、互いを試し試されながら、自分達自身で互いに相手と触れ合う」(348a1-2)ことによって、初めて可能になるからである。しかし、こ

のように不完全な擬似対話であっても、ソクラテスはその目的を達している。プロタゴラスには、最早「詩の領域」というソフィストの土俵でソクラテスにあらがう術は残されていないからである。ソクラテスはプロタゴラスに対して次の様に言うことになる。「私とあなたも、詩人達に引っ込んでもらって、真理と私達自身を試しつつ、私達自身で互いに向かって語りかけねばなりません」(348a3-6)[28]と。

『プロタゴラス』篇において、ソクラテスとプロタゴラスの対話はソクラテスの土俵から始まっている。それを一旦、ソフィストの土俵へと移行させた上で、そこから再び対話をソクラテスの土俵へと、即ち、一問一答方式による対話の地平へと引き戻す働きをしているのが、この「シモニデスの詩をめぐる議論」なのである。その還元の過程においてなされているのは、単なる知的遊戯や読者のための息抜きなどではない。また、単なるソフィストとソクラテスとの間の知恵比べでもない。「ソフィストとは何者であり」(312c4-5)、ソフィストの知恵とは何であるのかという問いへの答えが、上に述べたような形で示されているのである。ソクラテスはソフィストの知恵を問い、更に、自らを知恵あるものと称するソフィストにおいて、知恵とは一体何であるのかを問うているのである。まさに、『プロタゴラス』篇の主題が達成されているのである。

註

(1) "If the view which we have taken is correct, it will be vain to look for reasoned ethical teaching in this episode.'という言葉は Adam, xxv のものであるが、その後約一世紀を経て今に至るまで余り変化は見られない。例えば、Shorey, 128 "It contains little or nothing that bears on the main argument.", Jaeger, 178 "Er (Sokrates) gönnt dem Protagoras jedoch eine längere Atempause..." (しかし、387 n. 57 では "dieser historisch falschen Interpretation" と言いながらも、"Wer er sucht, durch beim Verhör als Dichter, ist die absolute Wahrheit, wie er sie sieht." と述べている)、Guthrie, 4:227 "Socrates... feels entitled to treat the subject with

outrageous levity. Here at least there can be no doubt that Plato knew what he was doing, and it is splendid entertainment, but hardly philosophy." この外、「ューモラスな息抜き」、「ソフィスティケーのパロディ」等の言葉は、Croiset, 18, Lamb, 88, A. E. Taylor, 251-257, Grube, 203, Vlastos, 127-129, Sullivan, 16, Parry, 299, Donlan, 100（但し、彼はソクラテスの解釈は 'basically sound' と主張しているが）, Gagarin, 151-152, Weingartner, 95, C. C. W. Taylor, 145-146, Klosko, 130 等に充溢している。また、近年の Goldberg 研究にしても、様々に有益な示唆を与えてくれ、この「シモニデスの詩をめぐる議論」にかなりの重要性を見出だそうと試み、「対話」ということに関しても言及してはいる（184-185）が、しかし、それらは発展されずに終っている。そのため、彼は第二部と第三部との間の本質的差異を識別できず、第三部を飽くまでも詩の解釈についての議論と見なし、結局は "ironic" "playful" 等の性格づけをせざるを得なくなっている。同様に、Stokes も「シモニデスの詩をめぐる議論」とこの対話篇の他の部分との関係について非常に有意義な論評を為し（e.g. 319-322）、「ューモラスな息抜き」、「ソフィスティケー」等の評価を退けてはいるものの、対話篇全体の整一的解釈を急ぐ余り、第二部と第三部とを区別せず、「対話」の重要性を見逃してしまっている。

以上の様な見解は単に欧米のみのものではなく、日本においても、例えば、藤沢令夫はこの「シモニデスの詩をめぐる議論」を『プロタゴラス』篇中の明らかに脱線的な遊びの部分として挙げ、以下の様に述べている。「（その前半の）部分がすでに『たわむれ』なのであるが、その上さらに…（後半のソクラテスによる大演説は）どうみてもこじつけとしかいえないような気ままな解釈をふんだんに織りこんでいる。…ソフィストのやり方のパロディとして、また一つの知的な遊びとしては、確かに秀逸であり面白い読みものであるが、しかしこの演説の内容が何らかの哲学的思想の表明をまじめに意図しているとは、とうてい言えないであろう」（257-258）と。

（2）先の「有能である（δεινόν）」という言葉は、この対話篇の序幕…ソクラテスとヒッポクラテスとの対話において、ソクラテスが「ソフィストとは何者か」（312c4-5）と尋ねた際にヒッポクラテスが「ソフィストとは人を言論に秀でた者（δεινὸν λέγειν）にする知識を持っている者である」（312d6-7）と答えた様に、ソフィストを特徴付ける言葉となっている。

（3）Jaeger, 178, cf. Stokes, 195-197, contr. Gagarin, 151.

（4）Jaeger, 378 n. 56, cf. Parry, 319-320.

（5）335a4-8, 338a7-b1 etc. また、この様に対話の相手を恰も知恵比べの如く自らの術・知恵によって打ち負かし、その場

にいた人々に自らの知恵を誇ろうというプロタゴラスの／ソフィストの動機は、しばしばこの対話篇の他の箇所でも示唆されている。例えば、317c-d, 318e. 335a, 347a-b Gagarin, 151, cf. Goldbeg, 159.

(6) これがヘシオドスという権威による証明であることも明かである。註11参照。

(7) Goldberg, 162.

(8) 317a-b, 333c f., cf. 328a1-c2.

(9) しかも、プロタゴラスはここで反論しているヘシオドス・シモニデスを、先には自らの先達として挙げていた(316d3-7)。

(10) Goldberg, 162-163, 167.

(11) 第三部で展開される、対話者のみをその証人とするソクラテスの対話論法との鮮やかな対比が為されている。cf. Stokes, 318, *Gorg.* 471d-472c. なお、併せて註25参照。

(12) ソフィストの知恵を一層戯画化するための装置として、ここでソクラテスは「有能である、恐るべき(*δεινόν*)」という語についてのプロディコス一流の解釈を持ち出す。即ち、ソクラテスが「プロタゴラスは知恵のある、恐るべき人だ(*σοφὸς καὶ δεινός*)」(341a9)と呼ぶ度に、プロディコスはソクラテスを叱って「恐るべきとは悪いもの(*κακόν*)のことだ」(341b1-2)とたしなめていたというのである。この「有能である、恐るべき、恐ろしい」という語こそは、上述の如く、プロタゴラスの知恵、「人間にとって教育の非常に重要な部分を成すのは、詩の言葉について有能である(*δεινόν*)ということである」のキーワードであり、ソフィスト自身を特徴づける言葉であった。Cf. 337a1-c4, 358a6-b1, Goldberg, 164-166.

(13) これは第一の反論に対するプロタゴラスの答「全ての人がそう思っているように」と引き合っており、この議論に同じ結果をもたらしている Cf. Goldberg, 168.

「我々他の者」をプロタゴラスの様な詩の解釈の専門家達を指していると見る人もいるかもしれない。しかし、これは明らかに専門家としての発言ではない。むしろ、ギリシア語を日常の言葉とするものが、「困難」という言葉の特殊な解釈に憤慨して吐いた言葉である。しかも、その様な特殊性に、プロディコスの学識の専門性があるとされ、そのことにはプロタゴラスは異を唱えてはいなかった。故に、ここでプロタゴラスは単にプロディコスの学識の専門性を否定しただけではなく、詩の言葉の特殊性、かつ、その解釈の専門性をも否定したことになるのである。

(14) Goldberg は、プロタゴラスをその得意の領域から追い立てたものは、議論の内容ではなく、この場面の特殊な状況(プロディコスやヒッピアス等の同業者を始めとする熱心な聴衆を前にしての討論であること等)であり、理論的にはプロタ

ゴラスはなお詩の解釈についての議論を続けられた筈だと考えている（Goldberg, 169, 216 n. 7）。しかし、第二部はソクラテスによる単なる「戯れ」ではなく、プロタゴラスの大演説（220c8–328d2）の内にある矛盾を暴き出している。その矛盾とは、プロタゴラスが自らの所有する知恵の専門性と教授可能性を両立させるために、前者に関しては国家を成立させる専門知としてその知恵について素人とであることを否定しつつ（327a1–2）、同時に、後者に関してその知識を市民が当然持つべき徳として、その専門性を否定せねばならなかった（322c7, d8）という、プロタゴラスの徳の教師・ソフィストとしての立場の矛盾である。更に、第二部はプロタゴラスが素人や大衆の思いなしとは一線を画しつつも、結局はそこへ行き着かざるを得ぬことをも明らかにしている（cf. Stokes, 318）。即ち、プロタゴラスはその得意の領域で自らの生き方の内に潜む矛盾に直面したが故に、その得意の領域から、詩という被膜を取り去った、剥き出しの徳の話へと追い立てられているのである。なお、註28を参照。

(15) 以下のソクラテスの演説が単にプロタゴラスが提示したシモニデスの詩における矛盾にのみ向けられたものではなく、プロタゴラスの、或いはソフィストの知恵全体に向けられていることは、その際の「先ほどプロタゴラスの指摘したソフィスト達と同様に」（342b3–4）という一句によって示唆されている。また、このスパルタ人への言及が皮肉か否かは今は不問に付すとしても（cf. Vlastos, 128, 129, Gagarin, 151）、このスパルタ人への言及が中断され、残されたままになっている徳の一性の議論〈勇気と知恵〉についての一つの例証となり得ることは明らかである。なぜなら、もし徳の一性が認められ、かつ、スパルタ人が勇気ある者ならば、彼等が知恵あるものであることは明白であるからである（cf. Stokes, 323–324）。

(16) この「シモニデスの詩をめぐる議論」の直接的な端緒である、ソフィスト達とソクラテスとの間の長い話し方と短い話し方についての「討論会」（334c7–338e5、特に334c7–336b3, Parry, 318–320）を参照。なお、併せて註25を参照。

(17) 註5を参照。Cf. Goldberg, 217 n. 11.

(18) 註3を参照。

(19) Adam, 174, Parry, 304–307, 315, 316, C. C. W. Taylor, 144–145, cf. Bowra, 329, contr. Donlan 78–82.

(20) Adam, 175, Donlan, 79 n. 16, C. C. W. Taylor, 145, cf. Stokes, 319.

(21) Goldberg, 189, cf. C. C. W. Taylor, 146, contr. Donlan, 85.

(22) C. C. W. Tayor, 145–146, cf. Adam, xxiv–xxv, 179, Goldberg, 190–191, contr. Donlan, 85–86.

(23) Jaeger, 387 n. 57, C. C. W. Taylor, 146, Goldberg, 186, cf. Adam, xxv, Donlan, 89, Gagarin, 152.

(24) C. C. W. Taylor, 147, Goldberg, 201.

(25) このシモニデスとの擬似対話を通して、ソクラテスは表面的にはシモニデスにピッタコスと対話させるという仮想対話を形成している。また、第二部にも対話があると思われるかもしれないが、それは決して対話ではない。少なくともソクラテス的対話ではない。ソクラテスの対話論法は多数決や（第二部での如く）権威によるものではなく、対話者の同意によって進められ、その同意を基にしてロゴスへと突き進もうとするものである。そして、その対話の結果として、対話者が（自らの生を支えている言説や思いなしの内に潜んでいる矛盾が顕かにされることで）論駁されることになるのである。拙稿「ソクラテスの対話による論駁法と生き方の原理――『ゴルギアス』474c-475c――」『哲学』23号、北海道大学哲学会（1987）を参照。

なお、③「防ぐ術なき災い」の意味を操作する際、ソクラテスは「このことは次の様に述べている別の詩人からも示されるところです。〈だが、すぐれた人は ある時は悪しき人 ある時は善き人〉」（344d6-8）と述べているが、これは一見「多数決や権威」による証明の様に見える。しかし、ソクラテスはこの詩句をも、シモニデスの詩の読解（特に、④「幸福」、「不幸のときは 悪しき人」の意味）に対して行ったのと全く同じ様な操作を行っている（cf. Adam, 178, Bowra, 329)。

(26) このことは以下のソクラテスの言葉から明らかである。即ち、

①「こそは」の修飾関係…「全く尋常でないように見えるでしょう」（343c7）、「全く合点のいかぬことのように見えるからです」（343d1-2）。

②「真に」の修飾関係…「この様な考え方は全く馬鹿げていてシモニデスのものとは思えないからです」（343e2）。

③「防ぐ術なき災い」の意味…「このことは次の様に述べている別の詩人からも示されるところです」（344b6-7）、「ということが必然なのです」（344e1）。

④「幸福」、「不幸のときは 悪しき人」の意味…「というのは、不幸とはただ一つ、知識を奪われることなのですから」（345b5）、「決してあり得ないでしょう」（345b6）。

⑥「醜をまじえぬものはすべて美しい」の意味…「というのは、そんな考えは多くの点でおかしなものでしょうから」（346d2）。

(27) ソクラテスはプロタゴラスが批判しているシモニデスを弁護し、その弁護を通じて、プロタゴラスに反論しているように見える。しかし、その実、ソクラテスはプロタゴラスがシモニデスを批判しているという構図に、シモニデスがピッタコスを批判するという構図をなぞらえ、暗にシモニデスを批

判しているのである（cf. Goldberg, 176-177）。その上で、その批判の意図、知恵の性質という点で、プロタゴラスと同一線上に立つことになるシモニデスを論駁し、ソクラテスの知恵へと導いて行っている。この点でまず一つ、プロタゴラスに対する非難が形成されている。更に、ソクラテスの知恵への導きのうちで、今度はソクラテスはシモニデス対ピッタコスという構図に、ソクラテス対プロタゴラスという構図を擦り合わせ、そして、ソクラテスの知恵によって再構成されたシモニデスによるピッタコスの批判が、ソクラテスによるプロタゴラスへの批判となるようしている。つまり、この第三部は単にシモニデスとの対話を描いたものではなく、むしろプロタゴラスに対する非難となっているのである（cf. Gagarin, 151-152, Stoke6, 319-320）。例えば、ほぼ全ての所謂「ソクラテスによる牽強附会」を通じて、「善は多様なものではなく、一つの相である」（cf. Stokes 319-320, 322）というソクラテスの主張・知恵が浮かび上がってくるが、これはプロタゴラスの大演説の中で述べられた善には様々な程度があるということ（327c4-e1）や、「善いもの、有益なもの」の多様性を述べた、所謂プロタゴラスの小演説（334a3-c6、一問一答による徳の一性についての対話を中断させ、ひいてはこの「シモニデスの詩をめぐる議論」を導くことになった演説）に対する反論となっている。なぜなら、ソクラテスにとって善き人とは知恵ある人であり、知恵は善であるからである。なお、その際、所謂「術の類比（craft analogy）」がここで用いられているが、それはソクラテスが知恵（σοφία）を知識（ἐπιστήμη）として理解していたことを示すのではなく（contr. Gagarin, 135 n. 10）、「術の類比」は知を所有することが人の在り方を決定するという、知と人の一般的な関わりを示すために用いられたのである（加藤信朗、「知恵と不知への関はり――『カルミデス』篇における知の問題」、『理想』第六〇一号、(1983), 5-8, 12-13, 29-30 n. 2, 31-32 n. 5を参照）。同様のことが対話篇の第二幕、「快楽説」でも見受けられるが、プロタゴラスは知恵と知識を区別せずに、否、区別出来ずに使用している（Stokes 235）。このことは「快楽説」がソクラテスの主張ではなく、むしろプロタゴラスに対する巧妙な argumentum ad hominem であることを示唆しているように思われる。また、⑤「自ら進んで」の修飾関係に関わる牽強附会は、有名な「自ら進んで悪をなさない」というソクラテスの主張を含み、この対話篇の第二幕の快楽説の導入部の役割を果たしている。更に、⑥「醜をまじえぬものはすべて美しい」の意味に関わる牽強附会は、一問一答による徳の一性についての対話における排中律の取り扱い方に光を投げ掛けている（cf. Stokes, 320）。なお、註13、14を参照。

(28) 第三部は、表面的にはソクラテスによる詩の解釈であるかの如くに見える。その実、本文に述べた様に、ソクラテスはシモニデスと対話しているのであり、たとえそれが擬似対話であるにせよ、ソクラテスの対話論法の地平を拓いているのである。ソクラテスは第二部でプロタゴラスを「事柄そのものについての、裸の話」へと追い立て、更に第三部の擬似対話を契機として、この結末において「互いに直接相手と触れ合う、面と向かっての話」へと引き摺って行こうとしている。「事柄そのものについて、互いに直接相手と触れ合うこと」とは、即ち、かの一問一答方式による対話であり、ソクラテスの対話論法に他ならない。以上の「シモニデスの詩をめぐる議論」の内実を、プロタゴラスはかなりの程度感じ取っていたと思われる。それ故、第二部の終りからこの結末にかけて、プロタゴラスは沈黙し、ソクラテスによって一問一答方式による対話へと戻るよう勧告されても、「雅答を与えず」(348d2) に、ぐずっているのである。ソクラテスが第三部を終えるや否や、ヒッピアスが第三部の表層のみを見て、意気込んで自分も「シモニデスの詩をめぐる議論」に参加しようとしている (347a6–b2) のとは好対照である。もっとも、これはプロタゴラスとヒッピアスとの理解力の差に因るのではなく、むしろ両者の生き方の違いに因っているのである (この違いは既にプロタゴラスの大演説の中で示唆されている (318d7–319a7, cf. 315b9–c7))。

〔参考文献（発表年代順）〕 本論に直接関係するものに限る。引用は著者名による。

J. &. A. M. Adam, *Platonis Protagoras*, Cambridge, 1893 (reset 1971).

A. Croiset, *Platon Protagoras* (Bude ed.), Paris, 1923 (1963).

W. R. M. Lamb, *Plato: Lackes, Protagoras, Meno, Euthudemus*, London, 1924.

A. E. Taylor, *Plato, The Man and his Work*, London, 1926 (1937).

P. Shorey, *What Plato Said*, Chicago, 1933.

G. M. A. Grube, 'The Structual Unity of the *Protagoras*', *Classical Quarterly*, 27, 1933, 203–207.

W. Jeager, *Paideia*, Bd. II, Berlin 1936 (1959).

G. Vlastos, 'Introduction to the *Protagoras*', *Plato, Protagoras*, Indianapolis & New York, 1956, 124–131.

C. W. Bowra, *Greek Lyric Poetry*, 2nd ed. Oxford, 1961.

J. P. Sullivan, 'The Hedonism in Plato's *Protagoras*', *Phronesis*, 1961, 10–28.

H. Parry, 'An Interpretation of Simonides 4 (Diehl)', *Transactions of the American Philological Association* (以下 *TAPA* と略す) 96, 1965, 297–320.

W. Donlan, 'Simonides, Fr. 4D and *P. Oxy.* 2432', *TAPA*

100, 1969, 71–95.

M. Gagarin, 'The Purpose of Plato's *Protagoras*', *TAPA* 100, 1969, 133–164.

R. Weingartner, *The Unity of Plato's Dialogue*, Indianapolis, 1973.

W. K. C. Guthrie, *A. History of Greek Philosophy*, vol. IV, Cambridge, 1975.

藤沢令夫「『プロタゴラス』解説」岩波書店版『プラトン全集』(第八巻)1975, 241–263.

C. C. W. Taylor, *Plato Protagoras*, (Clarendon Plato Series), Oxford, 1976.

G. Klosko, 'Toward a Consistent Interpretation of the *Protagoras*', *Archiv für Geschichte der Philosophie* 61, 1979, 125–142.

L. Goldberg, *A Commentary on Plato's Protagoras*, New. York, 1983.

M. C. Stokes, *Plato's Socratic Conversations*, London, 1986.

※ 本稿が校正の段階に入ってから、『プロタゴラス』篇の最も新しい註釈書である P. Coby の *Socrates and the Sophistic Enlightenment: A Commentary on Plato's Protagoras* (Bucknell U. P., 1987) を手にすることができた。彼は J. G. Clapp ('Some Notes on Plato's *Protagoras*,' *Philosophy and Phenomenological Research* 10, 1950, 486–499) や Goldberg を高く評価し、第三部のソクラテスによる「演説」を "esoteric" と性格付けたり、ピッタコス、シモニデス等に関する興味深い考察 (e. g. 110–111, 114, 130) を行ったりしている。しかし、対話を軸とした緻密な構成を見落してしまい、それらは発展されず、「シモニデスの詩をめぐる議論」は平板なものにされてしまっている。